

# 一銭陶貨

文学座公演



【五〇代】  
▼内容も演技も音響も感動。ひとつのセットなのに照明等演出で時代の変化や回想シーン表現。素晴らしかった。  
(女性)

【六〇代】  
▼出がらしと周りから言わ

れ、自らも生きる気力をなくしていた足の不自由な昭二(奥田一平)が、一銭陶貨造りを通して、彼を支える秋代(平体まひろ)と共に、前向きに生きようと変わっていく様子に好感が持てた。また、戦争というものが、被害にあった人々に身体的な傷と同時に心に大きな傷を残す理不尽さが、よく描かれていたと思う。(男性)

▼はじめて台本を読んでは本番を見ました。白黒の世界がカラーになったようでおもしろかったです。搬出もはじめて手伝ってみて面白かったです。(男性)

▼とてもいいお芝居でした。改めて戦争は嫌だと思いましたが。平和で観劇を続けられる世の中でありそうですよ。  
(女性)

▼一銭陶貨づくりを主題とした堂々たる王道の舞台。

細やかな演出も見事だった。平体まひろの台詞一つ一つに心ふるえた。(男性)

▼こんなことがあったのかと、まず、おどろき、ウクライナに、一日も早く平和をと願った芝居でした。希望は、生きるパワーと、人のつながり、あきらめないこと。秋代役のまひろさん一番!  
(女性)

▼陶貨製造の歴史と、粉砕・破棄の事実。傷痍軍人、精神を病む母。今、TVの中の戦闘の痛みと。戦争は要らぬ。  
(女性)

▼市井の人々はいつの世も為政者の自己本位の政策に翻弄されてきた。戦争はその最たるものである。人の心の中を土足で踏みしじり、容赦なく壊していく。権力者に生殺与奪の権を握られ、自分の命でありながら、途



中で無理矢理「生」を絶たれる。これは過去のことと言ってすまされない。戦争がないから平和なのではない。権力者の最近の言動にはもはや戦争前夜ともいえるような雰囲気の色濃く漂っているように感じる。演劇を見ることが個人の意思だけではどうにもならない社会に後戻りしないように、私たちは何をしなければならぬのか。それを語り合うことも演劇鑑賞運動にとつても大切なことではないかと思う。そこまでも考えさせる芝居であった。  
(男性)



▼六月二十三日「沖繩慰霊の日」にこの舞台を観ることはとても辛く、ウクライナの現実と太平洋戦争、そして沖繩と「戦争反対!!」を強く叫び出したくなりました。台詞がよく聴こえず残念です。  
(女性)

▼観劇前は反戦劇だと思っていた。戦争は愚かなものだ。兵器製造により金属が足りなくなり、割れやすい陶器で貨幣を作ろうというのだから……と。しかし、

観劇後は親と子、兄と弟、家族の話だと思った。過度な親の期待と無視、兄弟間のすれ違い。しかし、親子間の気持ちももう少し知りたかった。それにしても、お手伝いの秋代(平体まひろ)の、明るい前向きな姿勢は暗く陰鬱な舞台に希望の光が見えるようだった。平体さんのセリフも明瞭で聞き取りやすく、これからの舞台も楽しみです。(男性)

▼「一銭陶貨」七億分の一の奇跡」台本を読んでそうか、戦争中には鍋・釜・やかんなどを供出した話がよく聞きました。お金までが陶器で作ろうとするほど資源がなかった事を初めて知りました。お母さんのセリフで、「陶器でお金の代用こんなことで戦争に勝てる言うんですか、いつまで戦争を続ける気ですか」「この国が

何をした、何もかも奪うだけ奪って何がお国のためじや」もつとも言葉ですが、「聞こえるように言っとる」と言ったわりに少し声が遠慮気味に聞こえたのと効果音がものすごく全体にセリフが聞きづらかったのが残念でした。  
(女性)

▼二幕目からが本番かな？長男の行動が「これが戦争」と強く思いました。戦争は勝っても負けても破壊しかない。  
【八〇代】

▼戦争を体験したものとして、観るのがつらい場面がいっぱいありました。でも大事な事だと思えます。忘れないためにも、続けて欲しいです。  
(女性)

▼舞台装置しつかりした物で見応えあり。時間差の演出も違和感がなく見事でした。方言のせいかセリフが

時々聞き取れず残念だったが久し振りに芝居らしい芝居を見た感じがした。さすが文学座!!  
(女性)

【年代不明】  
▼会話が聞き取りづらかった。戦争はいやだ。人間として生きがいをもって、生活できない。家族のつながりもできない！舞台大きすぎ!

▼とても久し振りに観劇で泣いた。「約束ですよ」このセリフに込められた愛する者への思いに涙。約束は未来の象徴詩だから。

編集スタッフから  
投稿の常連はいると思えます。その会員は、きつとそこに楽しさを見つけたのでしよう。ある例会のセリフに「さがそうとせん奴には、死ぬまで見つからへんぞ」「楽しいことさ、探してみ」と。